

第5回風景デザインサロン●開催レポート

第5回風景デザインサロンの実施状況

去る平成20年1月25日（金）に、福岡市薬院にて、第5回風景デザインサロンを開催しました。

- 講師：山口ひろこ氏（イゴス色彩環境研究所所長）
- テーマ：日南市における市民参加の色彩ガイドラインづくり
- 開催時間・場所：18:30～21:00／ICON E（福岡市薬院）
- 参加人数：15名



第5回風景デザインサロンの開催です

第5回目のサロンでは、コミュニティ・カラリストを専門とされる山口ひろこ先生より、色彩とデザインについて宮崎県の日南市油津での実践事例を中心としてご説明頂きました。コンサルタントの方々にとってはすでに繁忙期に入っているため、始まりの時点での参加者が少なく心配していましたが、すぐにいつもと同じ程度の参加者が集まり、熱心にかつ楽しい講義が聴けました。質疑応答では、参加者から活発な質問があり、アツという間に時間が過ぎていきました。

講演内容の骨子

1. 講演の趣旨について

1) 山口先生が3年半をかけて地元の方々と喧々諤々しながら実践したという宮崎県日南市の油津における色彩デザイン計画の現場を紹介いただいた。色彩計画の基本的な知識、これまでの公共空間等における色彩への無頓着である現状、色彩計画のガイドラインを作る際の苦労する点等についていただいた。導入として、宮崎市のバスやタクシーの車体に使われているスカイブルーの色使いについて、南国宮崎において、とてもさわやかに感じる話を情感込めて話された。

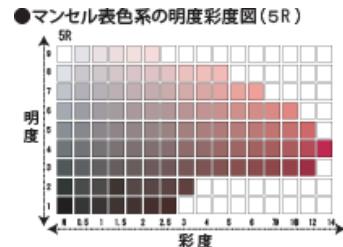


宮崎市のタクシーの色(スカイブルー)

2. デザインテーマ

1) 色彩デザインの基本

色彩デザインも「デザイン」同様に好き嫌いの話ではなく、いいものか、そうでないのかで評価するものである。色の基本は、「色相」「明度」「彩度」であり、例えば、マンセルの明度彩度図等を用い評価していく。専門の人でなくても、縁多い山の上の黄色の家があるのはおかしいと思うように、客観的に見るということが大切である。



2) 色彩デザインをするときの手法

その場を形成している色の評価をするために、写真でとった景観をモザイク上に加工してみると理解し易い。分解した色の情報を用いて、使える色の範囲を決める等の作業を行う。

また、フォトモンタージュによるものも、感覚的にも風景としてのなじみについて説明し易く、有効なツールとして活用している。



モザイク状にした建築物の例

3. 色彩計画の流れ

ステップ1：事前現地調査

ステップ2：専門家の作業

対象地周辺地区の景観・色彩基礎調査（景観を構成する現状の色彩を調べる）

分析（コンピューターによる集計作業、マンセル度数表にプロット

エリアごとのカラーパレットの作成）

ステップ3：基調にするものを決定するために関係者で議論

①油津らしい色とは～

- ・配色のあり方、コントラスト強弱の設定
- ・トーンの設定

②ガイドラインの対象の絞込み 誘導色の決定

・個別建築物、工作物の対象限定の方針発表

ステップ4：色彩ガイドライン素案作成



現地の調査風景

4. 色彩計画の心得

色彩計画を行うにあたって、地域の景観を良くするということは誰のために行うことか、また、それを誰が守っていくのかをしっかりと認識しなければいけない。行政の力でやっていくことではなかなか対応できることでなく、地元の住民の人たちが、自分たちの力で守っていくというコンセンサスを得ることがもっと大切である。そのために、地元の熱意があるところがやりがいがある仕事となる。

質疑応答

山口氏の熱心なご講演の後、質疑応答の時間を設けて意見交換をしました。風景デザイン研究会の会員メンバーをはじめ学生さんなどから、時間が足りなくなるほどの多くの質問や感想をいただきました。主な質疑応答は以下のとおりです。

- 1) (質問) 商業施設のデザインは目立つことをやっていくが、企業に色彩の調和等を聞き入れてもらうテクニックはなにがあるのか?
(回答) 規制をかけすぎると誘致できなくなるが、現在は、本物志向の流れにあり、クオリティをあげることに企業も注目している。油津ではひとつの運動として始まった感がある。ともかく、安普請の派手な施設は最悪である。
- 2) (質問) 土木のデザインと街並みのデザインとしてのカラーコディネートには、共通なものを感じる。例えば、あまり目立たないデザイン等。地元の風景がともかくばらばらの景観で、どこから手をつければいいのだろうか?まずは、教育からかとも思うが。
(回答) 醜い景観になっている街は、極論かもしれないが、その地域の人の心の現われでないかと思っている。無関心な人ばかりであれば、いい風景にはなっていない。おかしい風景についても「しょうがない」と考えあきらめるのはだめ。過去に乱開発で造られた新興住宅地等はなかなか難しいところがあるが、まず、キーパーソンになるような人をつくり、無関心な地域であれば地域を洗脳していかなければいけない。
- 3) (質問) 北九州市のカラールネッサンス計画があるが、ゾーンごとのまとめ方等については考えのか?
(回答) 北九州の場合の色彩計画は、臨海部が対象となっている。企業と行政のつながりの中で、北九州の玄関として考えたもの。街の中は、隙間を狙っていろいろなものがでてくるので、行政だけでコントロールすることがなかなか難しい。
- 4) (質問) ヨーロッパの街並みと日本の街並みの違いはどこからくるのか?また、中国・韓国・日本は同じようにあまり色彩について考えているようではなく、ごちゃごちゃしているが、教育の問題ではないのか、あるいは感覚自体に国民性があるのか?
(回答) ヨーロッパは色の基本ができていると思う。彩度やトーンを整えるのは当たり間のこととして考えている。建築の壁の色は、街にとって、人間の肌の色と同じである。派手なものやより大きなものをつくりといふことがいいこととは思われていない。個人の価値観の違いもあるのかもしれないが、隣と違うものを作ることにばかり目を向け、その影響を教えてこなったがある。また、これまで、あまりに短絡的な計画(人に優しい=ピンク)がまかり通っていた。これらは蛍光灯の影響でないかと思っている。蛍光灯はすべて照らすことでいいことで、光と影をつくるというものの見方をしてこなった。
- 5) (質問) 全体の色の調和が大切であり、どぎつくしてはいけないということと、緑のなかに赤いものを持っていくのはいいという、やりすぎと、ちょうどいいという違いはどこにあるのか?
(回答) 色の組み合わせについては、ニュートンの色彩論とゲーテの色彩論がある。自然界の法則と太陽との関係を考えることもある。寒色と暖色の組み合わせは、光と影のように、それぞれの分量を考える必要がある。ナチュラルカラーバランスを考えてみるといい。いい参考資料はたくさんある。
- 6) (質問) 色表を使うときの問題点はないか?近くのものと遠くのものでは色の捉え方が変わってこないか?
(回答) 遠くの空を評価するときと、近くの家の壁を評価するときのような意外と距離の違いによることには関係なく判断できる。なお、現場でアナログ的にやるのも大切だが、省力的にカメラで2次元の色の測定ができるマンセルビューアーというものを開発している。緑比率を図るグリーンビューアーも。
- 7) (質問) 多色使いは、日本人はなかなか苦手だということであるが?
(回答) 茶室の美しさのように、美しく見せるための環境カラーというものがある。何を主役にするかということで、色を見るための色と、色を見せるための色というものの(環境カラー)がある。日本は、もともとそういう美学を持っていた。こういうものは主張をしあう中では生まれない。相手のことを気遣う文化があった。それを蛍光灯が壊したのではないかと思っている。コンビにも、すでに存在が認められているのであれば、多色使いによって商業施設を鮮やかにすることではなく、わくわくする存在感のあるものにすることがいいのではないか。ちなみに、ディズニーランドとスペースワールドでは、色彩計画の観点から見て大きな違いがある。(しっかり考えてデザインしたものとそうでないもの)
- 8) (質問) 時間軸をどのように考えればいいか?素材の話につながるのかとも思っているが。
(回答) 同化することで、安心する色というのは肌の色だろう。ほっとするもの。白い舗装というものは歩きたくない。歩車道分離で歩道の部分に緑の舗装が出てくる。グリーンの色が安全の色彩といわれるが、色彩計画から言うと大きな問題である。

次回の予定

次回サロンの予定は、次のとおりです。なお、今年度の最後のサロンとなりますので、皆さん奮ってご参加下さい。

- 講 師 : 十時裕氏
(株)アーバンデザインコンサルタント代表取締役社長)
- テーマ : 「市民ワークショップのテクニック」
- 開催日時 : 平成 20 年 3 月 4 日 (火) 18:30 から 2 時間程度
- 開催場所 : ICON E (福岡市薬院一丁目) 予定



参加者も熱心に聞き入っていました